『縁を紡ぐ』ということ

井　坂　　聡

商売柄（この場合は映画屋として)、ロケーションで全国あちこちを訪れる機会が多く、以前は海外ロケにも頻繁に出かけていた。地方ロケの楽しみと言えばおいしい食事。２時間ドラマで旅館の看板を大写しにするだけでタイアップが成立していた時代には、20代の若造助監督の私でも、献立の記された紙が置かれた三の膳まであるご馳走にありつけたものだった。いつの頃からか段々と予算も世知辛くなり、海外はおろか地方ロケも難しくなっている現在では、そんな話をすると若いスタッフから妬まれるのがオチである。

さて、当たり前のことだが、私たちは観光ではなく仕事として各地を訪れている。そんな私たちにとって風光明媚な景色以上に重要なのが、その土地の方との人間関係である。これは地方ロケに限らずどこでも同じであるが、私たちは人さまの場所にお邪魔して撮影をさせてもらっているのであって、当然そこでの決まりに従う必要がある。都内などの貸しスタジオ（一軒家やオフィスビルも含む）であればビジネスライクにことを進めればよいし、街中でロケーションを行っていても、撮影慣れしている通行人も多いので、そんなに騒ぎになることはない。しかし地方に出かければ、その土地のルールや勝手も分からないし、あっと言う間に見物人に取り囲まれてしまうこともある（余談になるが、W浅野の全盛期、京都三条大橋のたもとの電話ボックスで浅野ゆう子さんが電話を掛けているという短い場面の撮影があった。準備をしていてふと気がつくととんでもない数の野次馬が集まっていた。京都の街中で現代劇の撮影をするということが珍しかった時代なのでそんな騒ぎになってしまったのである)。

地元のことは地元の方に聞くのが一番。今は各地にフィルムコミッションが存在しているが、私の助監督時代には、先行して下見に出かけて地元の協力者を探すことが

大切な仕事の一つであった。大体は役場や観光協会を訪れることから始まり、そこから自治会長さん、商店会長さんなど、地元と密着している方々に人脈を広げていく。その中でいわゆる地元で「顔が利く」人を見つけたらしめたものだ。その人と仲良くなれば、ドンドン口利きして輪を広げてくれる。それが理想的に進んだ例が、ちょうど30年前に東陽一監督の『絵の中のぼくの村』という映画の準備で高知に入った時のことである。

『絵の中のぼくの村』は、画家で絵本作家の田島征三さんが、染色家で同じく絵本作家の双子の兄、田島征彦さんと過ごした終戦直後の高知での子ども時代を記した同名のエッセイが原作である。きっかけは高知県の山間部の吾北村（現いの町）教育委員会の職員だった方が原作を読み、地元にはきれいな川や美しい山もある。ぜひ吾北を舞台にして映画を撮ってくれないかと、制作会社に原作本と『ごほく･樹と水物語』という村の写真集のようなパンフレットを送ってきたことだった。東さんと一緒に私は高知に出かけ、その後は私が一人残って原作にある戦後の高知の風景を再現できる場所を１か月くらい探し回った。田島さんたちが暮らしていたのは春野町という海に近い平地だったので、山深い吾北で全部撮影することは出来ず、国土地理院の25,000分の１の地図をにらんで地形を読み、とにかく車を走らせた。多い時には一日500㎞は運転していた。ちなみにカーナビはない。

そんな私が拠り所としていたのが、高知市の繁華街に今もある小さな飲み屋だった。そこを紹介してくれたのはプロデューサーの知り合いのお医者さんで、名士が集まる店との触れ込みだった。確かに（名士と呼ばれると本人たちは、そんなんと違うと言っただろうが)、高知新聞、高知放送、県庁、市役所などの中堅幹部クラスの方々が常連のお店だった。といっても銀座のクラブのような佇まいではなく、私の母と同世代の女性（私はお母さんと呼んでいた）と、私より少し上の娘さんの二人で切り盛りする、10人も入ったらいっぱいの、靴を脱いで上がって座るカウンターだけの居心地のいいお店である。そこに毎晩のように通って、目の前に並ぶお母さんの作る大皿料理を見繕ってビールを飲みながら、今日はどこに行ってきた、明日はどこに行くつもりだと、手にした地図を見せながら報告するのが日課だった。その内にお母さんが常連さんたちに「井坂君がこんなに苦労しゆうがやき、あんたらぁも何ちゃあ探しちゃり」と応援してくれ、私も図々しく常連さんたちに食いついていった。酒場で地図を広げられた相手はいい迷惑だったかもしれないが、貴重な情報をたくさん得られたし、土地勘も人脈も深まっていった。

映画の制作は諸事情あって２年後の1995年となったが、いったん信頼が生まれる

と、とことん協力を惜しまない高知の人々の心意気のおかげで、素晴らしい映画が出来上がり、『絵の中のぼくの村』は1996年ベルリン国際映画祭銀熊賞に輝いた。この映画のおかげで、お世話になった方々との関係は今でもずっと変わらずに続いている。（ちょっと自慢をさせていただくと、私の映画デビュー作『【Focus】』も翌1997年のベルリン国際映画祭フォーラム部門で受賞、師弟で２年連続の栄誉となった。）

さて、長い前置きとなったがここからが本論となるので、大学教員の顔に戻ることにする。

自分で言うのもなんだが、私は地域協働活動に積極的に取り組んでいる教員の一人であると思う。部屋にこもっているのが苦手で、外で体を動かすことが好きという体育会体質もさることながら、新たな人との出会い、「縁」を結びたいという気持ちが強いからである。そしてこの「縁」の大切さを学生たちに伝えたいからである。「縁」とは言葉を換えれば「人脈」であるが、これは一朝一夕で紡げるものではない。しかし、人生において間違いなく最高の財産となるのが「縁」であり「人脈」であることは身に沁みており、彼女たちにも沢山の「縁」という財産を蓄えてほしいと願っているのである。

ゼミも授業も実習型なので学生たちとおしゃべりする機会が多いが、その時に感じるのが、社会マネジメント学科の学生はみんな好奇心旺盛だなということである。引っ込み思案だったり、言葉にするのが苦手な子もいるが、ちょっと誘い水を向けると内心の興味をニコニコと語ってくれる。そんな彼女たちなので、今まで行ったことのない場所を訪れたり、やったことのないことに挑戦したり、違う世代の方々と交流する場を作ると、喜んで参加してくれる。そんな事例を幾つか紹介したい。

先ずは、今年度の相生祭で実現した「きりたんぽ鍋」の模擬店である。きりたんぽは秋田県の名物だが、その中でも比内地鶏の地元である大館市はきりたんぽ発祥の地と自負している。その大館市との交流が始まって足かけ６年になるが、毎年、学生たちを大館市に連れて行って必ず食べるのがきりたんぽ鍋。本場の味は格別で、お土産に地元のスーパーで売っているきりたんぽとスープを買って帰るのが定番だ。この美味しさをぜひ味わってもらいたいと、相生祭での販売に漕ぎ着けた。

模擬店は８名の学生が運営したが、４年生の４名は2021年度の大館市との交流活動計画がコロナや地震の影響で延期になってしまい、１年間のお預けの後、ようやく大館訪問が実現した代である。その分思い入れも強く、９月に現地で実施したイベント『おおだて縁日』では、雰囲気を盛り上げるために簾を用意して折り紙で作った朝顔を飾ったり、同じく折り紙の提灯をぶら下げたりと趣向を凝らしていた。大館市の職

員の方々も準備や当日の運営を手伝ってくださったが、奥貫先生や私が指示を出すまでもなく、学生たちが積極的に職員の方々と打ち合わせしながら作業を進めていく姿は大変頼もしかった。

イベントの翌日には、相生祭に備えてきりたんぽ作り体験教室に参加した。炊きあがったご飯をすり鉢に入れて潰していくところから始まり、それをこねて木の棒に巻きつけるように伸ばし、専用の機械で焼き上げる。出来上がった自分のきりたんぽに味噌をつけて味わい、そしてもちろんきりたんぽ鍋も。食べる前には具材の盛りつけの順番を教わることも忘れなかった。学生たちが楽しみながら真剣にきりたんぽ作りに取組み，しかも中々の出来ばえで、指導に当たってくださったお店の方も、これなら安心と太鼓判を押してくれた。

相生祭では、そのお店の方々が調理テントに入って、あらかじめ下ごしらえして冷凍・冷蔵の真空パックで送ってきた具材やスープを温めて戻し、それを販売テントに運んで、学生が盛りつけ最後にスープを掛けてお客様にお出しした。スープの匂いに釣られてお店は大繁盛で長蛇の列となったが、学生たちの手際のよさ、チームワークの良さがここでも遺憾なく発揮され、大きな混乱は生じなかった。私は学生に言われるままに使い走りとして、食材やスープの補給で調理テントと販売テントをひたすら行ったり来たりしていた。

２日間で500食を完売し、お店の代表の方も大喜び。さらに、これならもう私たちが手伝わなくても食材を送ってみなさんに全部お任せできる、と褒めていただいた。様子を見にいらしていた大館市の職員の方も感心して、来年はもっと色々やりましょうと言ってくださった。４年生が引っ張り、その姿を３年生がしっかりと受け継ぐ。ここで構築された人間関係が継続できるように場をしっかりと保つことが私の仕事であると肝に銘じた。

もう一つの事例は、地元相模原でのボランティア活動である。児童福祉施設で育ったり、家庭の経済的な事情で七五三や成人式の写真を撮りたくても撮れない、あるいは撮れなかった人々に、衣装の提供と着付け、ヘアメイクなどもセットになって格安の値段で写真撮影を行う『着物de文化フォト未来事業』の主宰の方から、事業の認知度がまだまだ低いので、この催しの様子をビデオで撮影してＰＲ動画を作ってもらえないかという依頼があった。日程を確認して早速ゼミの３年生に声を掛けたところ、参加したいとすぐに４～５人が手を上げてくれた。

延べ２日間で写真を撮りに来た方々は50人くらいであっただろうか。諦めていた写真を撮ることができてこんなに嬉しいことはないと涙ぐんでいるお母さんの姿を見

て、こちらももらい泣きしてしまったが、それ以上に学生たちが感動していた。そして、感動だけでなく、普段の生活の中では中々知り得ることがない悲しさや苦労に目の前で接することで、自分たちがいかに幸せに暮らしているのかということも深く心に刻んだようだった。

この動画制作は授業が終わった２月から本格的に取りかかるが、そこで映像を見返すことで、また彼女たちに撮影時の思いがよみがえって、さらに深化し、大きな成長に繋がるのではないかと確信している。

これ以外にも、ゼミでは相模原市看護協会や消防局の依頼を受けてＣＭ制作などを行ってきているが、どれも今まで知らなかった世界との出会いの場となっており、それを通じて学生たちの視野が広がっていくきっかけになっている。私は常々、モノ作りの一番基本は好奇心と観察眼だと学生に説いている。常に自分のアンテナを高感度にして、広く浅くで構わないから色々なものに目を向けなさいと繰り返しているのだが、場を用意して、スイッチを押してあげることが、教員の役目だと思っている。

繰り返しになるが、社会マネジメント学科の学生はきっかけさえあれば、後はどんどん自分たちで積極的にものごとを進めていく能力を持っている。そんな彼女たちの可能性を引き出し、様々な「縁」を紡いでいけるように、私自身もますます積極的に輪を広げていきたい。